

アイヌ口承文芸「散文説話」

—タンネサラの男—

大谷洋一

- 目次 1 まえがき
2 アイヌ語テキストと対訳
3 日本語テキスト

Key Words アイヌ口承文芸 (Ainu oral literature)、ウウェベケレ (Uwepeker)

1 まえがき

本稿で紹介するテキストは、沙流郡平取町字ペナコリ出身の上田トシ氏（1912～2005年）が伝承していた、アイヌ語沙流方言などでは「ウウェベケレ uwepeker」と呼ばれる「散文説話」というジャンルの物語である。

本編のアイヌ語と日本語による口演は、1995年5月8日に上田氏の自宅で筆者が採録した⁽¹⁾。上田氏は、早稲田大学名誉教授田村すず子氏（1934～2015）から贈呈された『アイヌ語音声資料』のカタカナ版に収録されたテキストを読んでこの物語を覚えたと言っていた。田村氏はこの物語を平取町字二風谷の二谷国松氏（1888～1967）から1957年10月25日に録音し、1989年にローマ字表記版⁽²⁾を、1993年にローマ字カタカナ並記版⁽³⁾を刊行している。

上田氏によると、この物語を初めて口演したのは1995年2月に平取町で開催された「シシリムカアイヌ文化祭」での舞台である。筆者はその場に行くことが出来なかったのではあるが、上田氏は常にウウェベケレの口演時間を15分程度にするように開催者から要求を受けていたため⁽⁴⁾、このような短めの物語を舞台上で演じるために積極的に独習していたものと思われる。

二谷氏の語りの時間をカセットテープ⁽⁵⁾で測ると5分10秒であった。上田氏はそれを3倍以上の15分46秒かけて口演している。上田氏の口演時間が延びたのは、主

人公の息子の病気を治療する場面や、語り取めの部分で飢饉で苦しんだ村人たちの体調が徐々に回復して大きな獲物を獲ることが出来るようになった過程や平取に住む霊力の強い老人に救われた事情などを、より詳しく語っていることなどが要因の一つと考えられる。

なお、この話と同じ散文説話は、1995年9月9日以降に白老町の一般財団法人アイヌ民族博物館において安田千夏氏が採録しており、同館のホームページ上から視聴できるwebコンテンツ「アイヌ民族博物館 アイヌ語アーカイブ」に、同じ物語の別バージョンが2話公開されている⁽⁶⁾。

あらすじ

私はタンネサラに住んでいたが、どうしたわけか私の村が飢饉になって苦勞していたところ、千歳では魚が豊漁であるという噂を聞いた。そこで遠くに連れて行っても心配のない年頃の息子がいたので、子供と一緒に千歳に行くことにした。途中で鶴川に着くと、そこで川の渡し守をしている人がいた。私が声をあげると貧しそうな男が出て来て川を渡してくれた。それから千歳に行くと魚がたくさんいた。そこで魚を背負って帰り、鶴川に着いて私が大声で呼ぶと女が家から出て来たので、「どうしてあの男が来ないで女が舟に乗ってきたのか？」と訊ねると、女は「昨夜、声がしたので夫が人を川渡しに行くと、帰って来なかった。不思議に思って松明を持って

大谷洋一：北海道博物館アイヌ民族文化研究センター アイヌ文化研究グループ

(1) 旧北海道立アイヌ民族文化研究センターにおける資料番号はCC000329、公開資料番号はCC800082（タイトルは「平取町の伝承9」）。

(2) 田村（1989：2-9）。

(3) 田村（1993b：114-121）

(4) 筆者は上田氏から常々、30分程度の時間がかかる物語を半分短縮して演じるように要求されることに頭を悩まされていたのを聞かされていた。ある舞台では、上田氏のウウェベケレ口演途中で司会者から「長すぎるから」という理由で中断されて最後まで言い切ることができないのを筆者は何度か目にしてきた。上田氏はそれがストレスになっていたようであった。

(5) 田村すず子「アイヌ語音声資料-6-」のA面「二谷国松さんの民話」で音声公開されているが、現在では入手困難である。

(6) 「35226AP 上田トシの伝承 散文説話「沙流が飢饉で千歳まで...」コンテンツ番号「C0199UT」。この物語は、アイヌ民族博物館、2015『上田トシの民話3』に掲載されている。もう一つのコンテンツ番号は「C0201UT」。

川に下りてみると、夫の乗った舟が流れているので先回りして舟をつかまえて岸へ上げると、夫は意識を失っていたので、なんとかして家に運んで寝せているのです」と答えた。私は可哀想に思い「それならば、私が見てお祓いをしてよいか？」と言うと、女が喜んで了承したので、お祓いすると男は正気に戻った。その夫婦は互いに喜び、お礼にたった一つだけしか持っていなかった宝刀を私に差し出した。私はこのように貧しい夫婦から宝刀を受け取るのは哀れに思い、「結構です」と断って受け取らずに帰った。自分の息子を連れて沙流川河口に着くと、我が子が意識を失ってしまった。平取には霊力の強い老人がいると聞いていたので、すぐにそこへ行った。私が事情を話すと老人は「どこかでお祓いをしてこなかったか？」と訊ねたので、鶴川で意識を失った男の体を叩き清めて来たことを話した。老人は、「相手が貧乏人であってもお礼の品物を受け取らなかったら、悪い神の力が勝って、お前の子供の具合を悪くさせてしまったのだ。」と言うと、息子を叩いてお祓いすると息子はすぐに治ることができた。私は老人に幾度も礼拝した。すると老人は「お前が背負ってきた魚を一匹くれ」と言い、その魚をイヌの方へ捨てると、それを食べたイヌは死んでしまった。そして老人は「お前が背負ってきた魚はイルシカ川（鶴川の西隣の川）のところで毒気がついてしまい、自分の村へ帰って仲間に食べさせたら全員が死ぬと思ったのでイヌに食わせて死ぬ様子を見させたのだ」と言った。そして、私の背負ってきた魚を全て燃やした後で、大きな赤いイヌに礼拝してから殺した。老人は「この肉を煮て仲間に食べさせ、骨は燃やしてその灰を病人の腰の辺りに塗れば動けない人たちも治るだろう」と言ってイヌ肉を与えられた。私はその肉を村へ持ち帰り、仲間に肉や骨の汁物を食べさせたところ、二三日すると仲間の体調が良くなった。そして、村人は山へ狩りに行き、キツネでもウサギでも獲って村人で分け合って食べられるようになった。それから仲間が元気になってからはクマでもシカでも獲るようになり、私は喜んで平取の老人に感謝の言葉を捧げた。今ではタンネサラの村人も裕福になり、何も心配事もなく、何を欲しいとも思わないほど幸せになった。私は自分が亡くなる前に「平取の老人のおかげでタンネサラの村が栄えたのだから、今後は平取に行っても仲よく付き合っていくのだぞ」と言い残したのだと、タンネサラの男が話して死んだという話だ。

謝辞

本稿の作成にあたって、査読していただいたお二人の先生からアイヌ語の聞き起こしや意味の解釈などで多くの改善点のご指摘を受けることができました。

記して心から感謝申し上げます。

〈アイヌ語テキストの凡例〉

(1) 本文の構成

二段組として、一段ごとにアイヌ語による語りはカタカナとローマ字の順で表記した。その下に日本語訳を記し、注記は各ページの下に記した。

(2) カタカナの表記

基本的に北海道ウタリ協会発行の『アコロ イタク』の表記の仕方と同じである。ただし音節末の r はそのときどきで、ラ、リ、ル、レ、ロ、に近い音が出たり、母音が付いたりする場合があるので、それが比較的に目立つ場合はその近い音を記した。また、言いさしや特に意味をなさない言いよどみは () で括った。聞き取りや解釈の難しい単語の後に (?) を付した。

音素交替によって変化した音はそのとおりに記した例：「ボン セタ」→「ポイセタ」。

(3) ローマ字の表記

基本的に『アコロ イタク』と同じ方式で記した。日本語の場合は全て大文字で記した。音素交替を起こしたところは、単独で発した場合の形で記した。例：「poyseta」→「pon seta」。

地名の語頭は大文字を記した。よく聞き取れない音や意味の解釈が不確実な語句については、そのローマ字の語尾に「??」を付けた。

(4) 対訳の〔 〕内表記

日本語の意味として読解しにくい箇所は、註あるいは〔 〕内にことばを補った。

(5) 参考文献は以下のとおりであり、本編の注釈内では

[] にそれぞれの筆者の頭文字を記した略号として用いた。

奥田統己編 1999. アイヌ語静内方言文脈つき語彙集 (CD-ROMつき). 札幌学院大学人文学部.

[萱] 萱野茂 1996. 萱野茂のアイヌ語辞典. 三省堂.

[久] 久保寺逸彦 1994. 平成3年度 久保寺逸彦 アイヌ語収録ノート調査報告書 (久保寺逸彦編 アイヌ語・日本語辞典稿). 北海道文化財保護協会・北海道教育庁生涯学習部編.

[ジ] ジョン・バチラー 1981. アイヌ・英・和辞典 第四版. 岩波書店.

田村すず子 1989. アイヌ語音声資料6. 早稲田大学語学教育研究所.

田村すず子 1993. アイヌ語音声選集—散文篇—, 早稲田大学語学教育研究所.

[田] 田村すず子 1996. アイヌ語沙流方言辞典, 草風館.

[中] 中川裕 1995. アイヌ語千歳方言辞典, 草風館.

[ア] 一般財団法人アイヌ民族博物館, 2015. 上田トシの民話3, 一般財団法人アイヌ民族博物館.

2 アイヌ語テキストと対訳

タンネサラ ウン クル
Tannesar⁽⁷⁾ un kur
タンネサラに住む者が
アネ ヒネ アナン ヒケ
a=ne hine an=an hike
私でした。
マク ネ ワ ネ ヤ
mak ne wa ne ya
どうしたわけか
アコタヌ ケムシ カ
a=kotanu kemus ka
私の村は飢饉も
エラムシカリ プ ネ ア プ
eramuskari p ne a p
経験したことがなかったのですが
エクシコンナ アコタヌ ケムシ ヒネ
ekuskonna a=kotanu kemus hine
突然、私の村が飢饉になって
(ネウン) エネ イキアニ カ イサム ノ
ene iki=an hi ka isam no
私たちはどうすることも出来なくて
ヤイウエンヌカラアン コロ
yaywennukar=an kor
苦勞して
アナン ラポッケ
an=an rapokke
暮らしていたところ
パハウ ネ アヌ ハウエ エネ アニ
pahaw ne a=nu hawe ene an hi
噂を聞きました。
エネ アニ シコトウン⁽⁸⁾、オツ タ
ene an hi Sikot un, or ta
千歳には
チェプ アスル アシ ヒ クス
cep asur as hi kusu
魚が豊富にいるという噂がたったので
(シ) シコトウン (オ) ウイマムエアラパアン
Sikot un uymam'earpa=an⁽⁹⁾
千歳へ私が交易に行こう

(7) [田] によれば、「現在の北海道沙流郡平取町字振内にあった地名, tanne-sar 《長い・アシ原》, 松浦武四郎『左留日誌』等に見える。」と説明がある。

(8) 「シコトウン Sikot un」と聞こえるが、「ウン un (〜へ)」と言いさしたがすぐに「オツタ or ta (〜のところ)」と言い直したと思われる。

(9) 「ウイマムエアラパアン uymamearpa=an」に「和人との交易」を意味する「ウイマム uymam」という言葉が語幹にあるが、二谷氏のテキストや上田氏の別バージョンのテキストには見当たらないため、上田氏の言い間違いの可能性はある。

クナク アラム コロ ナヌ (?)⁽¹⁰⁾ ラポッケ

kunak a=ramu kor an=an??, rapokke

と置いていたところ

タネ トウイマノ アトゥラ ヤッカ (アウ…)

tane tuymano a=tura yakka

今はもう、遠くへ連れて行っても

アエシンパイ カ ソモ キ ノ

a=esinpay ka somo ki no

心配することもない

アン ヘカチ アコロ ペ ネ ヒケ

an hekaci a=kor pe ne hike

男の子がいたので

ネ ヘカチ アトゥラ ヒネ

ne hekaci a=tura hine

その子供を連れて

シコツ (ウン パイエア、ポ…)

Sikot

千歳

コパッケ ウン パイエアン ヒネ

kopakke un paye=an hine

の方へ向かって行って

ムカ タ アラパアン ルウェ ネ アクス

Muka ta arpa=an ruwe ne akusu

鶴川に行くと

ムカ タ ペツ (エク…) エプンキネ ウタラ

Muka ta pet epunkine utar

鶴川に川の渡し守の人たちが

オカ ヒネ ホトウイパアン ルウェ ネ アクス

oka hine hotuypa=an ruwe ne akusu

いたので私が大声で呼ぶと

(オ) オッカヨ ソイエネ ヒネ

okkayo soyene hine

男が外に出て

エク ヒネ イクサ リヤ (?)⁽¹¹⁾

ek hine i=kusa ruwe??

来て、私を舟で川を渡すの (?)

アヌカラ シリ (イ) イシラムネ

a=nukar siri isramne

を見たところ、貧し

ルウェ ネ ノイネ アン オッカヨ

ruwe ne noyne an okkayo

そうな男が

イクサ ヒネ (エ、ラ) ヤパン ヒネ

i=kusa hine yap=an hine

川を渡してくれて、私は岸に上がって

ネ シコツ タ パイエアン ルウェ ネ ヒネ

ne Sikot ta paye=an ruwe ne hine

千歳に行つて

シコツ タ パイエアン ヒネ

Sikot ta paye=an hine

千歳に行くと

チェプ ポロンノ アン ヒネ

cep poronno an hine

魚がたくさんいて

ネプ カ ニイエシケ (ブネ) パクノ

nep ka niesike pakno

しょいこいっばいに

ネ サツ チェプ⁽¹²⁾ アセ ヒネ

ne sat cep a=se hine

その干し魚を背負つて

オラ スイ ホシピアン ヒネ (エ)

ora suy hosipi=an hine

それからまた私は帰つて

エクアン ヒネ ムカ タ ネ ヤ (ア、イ)

ek=an hine Muka ta ne ya

来て、鶴川だか

エカン ルウェ ネ ヒネ

ek=an ruwe ne hine

来て

ホトウイパアン ルウェ ネ アクス

hotuypa=an ruwe ne akusu

私が大声で呼ぶと

(ウ) メノコ ソイエネ ヒネ

menoko soyene hine

女が外に出て来て

イクサ (ア) クス (クス、ネ、エク) エク ヒネ

i=kusa kusu ek hine

私を舟で渡すために来て

チプ オロ ウン (ア) オ ワ ヒ クス

cip or un o wa hi kusu⁽¹³⁾

舟に乗ったので

ネ メノコ エウン 「マク ネ ヒネ

ne menoko eun "mak ne hine

その女へ「どうして

(10) 文脈的には「アナン an=an (私がいた)」と言おうとしたと推測するが、実際には「ナヌ」のように聞こえる。

(11) 「リヤ」と聞こえるが、文脈的には形式名詞「ルウェ ruwe (こと、さま)」の可能性もある。

(12) 二谷氏のテキストでは「魚を背負つて」とあるが、上田氏は「干し魚」と表現している。主人公は魚を干すために数日間は千歳に滞在していたということだろう。

(13) カタカナ表記のように聞こえるが、文法上で考えられるローマ字で記した。

オッカヨ ソイエネ カ ソモ キ ノ
 okkayo soyene ka somo ki no
 男が出て来ないで
 メノコ チポ シリ ネ ヤ
 menoko cip o siri ne ya”
 女が舟に乗ったのか
 アコウウェペケンヌ アクス
 a=kouwepekennu akusu
 と私がわけをたずねると
 エネ ハウエアニ
 ene hawean hi
 このように言った。
 「ウ克蘭 ネ (エ)
 “ukuran ne
 「夕べ
 タネ シリクンネ コロ
 tane sirkunne kor
 もう暗くなると
 ホトウイバ ハウ アシ ヒ クス (ニ、エヤ…)
 hotuypa haw as hi kusu
 呼ぶ声がしたので
 アコロ オッカヨ (オ) イクサ (ヒネ) クス
 a=kor okkayo ikusa kusu
 私の夫が舟で渡すために
 ソイエネ ア プ オラ
 soyene a p ora
 外に出たのですがそれから
 アフン ルウェ カ イサム ラポッケ
 ahun ruwe ka isam rapokke
 家に入ってこなかったところ
 ネプ カ ペトルン ネプ カ (ペツ、カ、ア…)
 nep ka pet or un nep ka
 何か、川の方で何か
 ペトゥン (オ) アオヤモクテ (アプ)
 pet un a=oyamokte
 川で、不審に思った
 ヒ クス ナニ ポロ タトゥシベ
 hi kusu nani poro tatuspe
 ので、すぐ大きな松明を
 アコロ ヒネ
 a=kor hine
 私は持って
 タトゥシベ アコロ カネ ヒネ
 tatuspe a=kor kane hine
 松明を持ちながら

ペトルン サナン ルウェ ネ アクス
 pet or un san=an ruwe ne akusu
 川へ下りてみると
 チプ ネ ヤ…、(アコロ) アホクフ オ ア
 cip ne ya…, a=hokuhu o a
 舟だか…、私の夫が乗った
 チプ モム ヒネ サン ヒ クス
 cip mom hine san hi kusu
 舟が流れて下っている
 カシ アエトウシマク ヒネ ホユプアン ヒネ
 kasi a=etusmak hine hoyupu=an hine
 そこへ先回りして走って
 (エサン ヒネ エサン) サナン ヒネ
 san=an hine
 下りて
 ネ チプ アキシマ ヒネ アヤンケ アクス
 ne cip a=kisma hine a=yanke akusu
 その舟をつかまえて岸へ上げると
 チプ オンナイ タ アホクフ
 cip onnay ta a=hokuhu
 舟の中で私の夫が
 オアラ ヤイエランペウテク ヒネ
 oar yayerampewtek hine
 まったく意識を失って
 アン ヒネ オラ アエキマテク コロ
 an hine ora a=ekimatek kor
 いて、私は驚きながら
 (オ、チチ…) エカン ヒネ (チプ、ニ…)
 ek=an hine
 来て
 オラ アコン ニシパ アカラ アイネ (エ)
 ora a=kor nispa a=kar ayne
 私の夫をなんとかしてようやく
 アアフンケ ヒネ アホッケレ ア プ
 a=ahunke hine a=hotkere a p
 家に入れて寝させていたのですが
 ナニ ネノ ホッケ ワ アン ワ
 nani neno hotke wa an wa
 すぐこのように横になって
 オアラ ヤイエランペウテク ノ
 oar yayerampewtek no
 まったく意識がないように
 アン ルウェ ネ」 セコロ
 an ruwe ne” sekor
 なってしまったのです」と

ネ イマチヒ ネ メノコ
 ne imacihi ne menoko
 その妻である女が
 ハウエアン ワ アケムヌ ケウトウム
 hawean wa a=kemnu kewtum
 言って、私は哀れな気持ちを
 アコロ (オ) ヒネ オラ チプ オロ ワ
 a=kor hine ora cip or wa
 持って、舟から
 ヤナン ヒ オラ 「ヤクン アヌカラ
 yan=an hi ora “yakun a=nukar
 岸に上がってから、「それならば私が見て
 アエポタラ ヤッカ ピリカ ヤ」
 a=epotara yakka pirka ya”
 おほらいしてもよいか」
 セコロ アコウウエペケンヌ アクス
 sekor a=kouwepekennu akusu
 と訊ねると
 エヤイコブンテク ヒ クス アフナン ヒネ
 eyaykopuntek hi kusu ahun=an hine
 彼女は喜んだので家に入って
 インカラン ヒネ イシラムネ (ア、ア) ルウェ (ハ)
 inkar=an hine isramne ruwe
 見て、彼らが貧しいことを
 アエランポキウエン (コロ) コロカ オラ
 a=erampokiwen korka ora
 かわいそうと思ったが、そこで
 ネ ホッケ ワ アン オッカヨ
 ne hotke wa an okkayo
 横になっている男の
 カシ アキク ネ ヤ キ アクス ラポッケ
 kasi a=kik ne ya ki akusu rapokke
 身体を叩くとかすると
 ヤイエラムアン ルウェ ネ ヒネ
 yayeramuan ruwe ne hine
 彼が気がついて
 オラ エアラキンネ エヤイコブンテク ヒネ
 ora earkinne eyaykopuntek hine
 とても喜んで
 イマチヒ カ (イホクネ) ホクフ カ
 imacihi ka hokuhi ka
 妻も夫も
 エヤイコブンテクパ コロ オラ
 eyaykopuntekpa kor ora
 喜んでから

ヘル アツタクプ シネ (エ) ソサムシペ
 heru ar takup sine e sosamuspe⁽¹⁴⁾
 たった一つの宝刀
 タクピ アン ルウェ アヌカラ ア プ
 takupi an ruwe a=nukar a p
 だけがあるのを私は見ていたものだが
 ネア ソサムシペ サンケ ヒネ
 nea sosamuspe sanke hine
 その宝刀を出して
 イコレ コロカ (ア、アウ) アケムヌ
 i=kore korka a=kemnu
 私にくれたけれども哀れに思った。
 エネ イシラムネ ルウェ オカイ ペ セコロ
 ene isramne ruwe okay pe sekor
 このように貧しく暮らしていると
 ヤイヌアン ワ 「ピリカ ピリカ」 ヤカイエ コロ
 yaynu=an wa “pirka pirka” yak a=ye kor
 思っ「けっこうです」と言っ
 ネ (エ) ソサムシペ アウク カ ソモ キ ノ
 ne sosamuspe a=uk ka somo ki no
 その宝刀を受け取らずに
 オラ ホシピアン ヒネ アラキアン ヒネ (エ)
 ora hosipi=an hine arki=an hine
 私は帰って来て
 アコロ ヘカチ トウラノ
 a=kor hekaci turano
 自分の息子と一緒に
 ホシッパアン ヒネ アラキアン ヒネ (エ)
 hosippa=an hine arki=an hine
 帰って来て
 サラプトウ タ アラキアン ルウェ ネ ヒネ (エ)
 Sarputu ta arki=an ruwe ne hine
 沙流川の河口に来て
 アクス ラポッケ オラ アコロ ヘカチ
 akusu rapokke ora a=kor hekaci
 すると私の息子が
 ヤイエランベウテク ヒ タ
 yayerampewtek hi ta
 意識を失った時に
 ネウン アカラ ヤッカ (ア)
 neun a=kar yakka
 どのようにしても
 ヤイエランベウテク ヒ オラ (アカラ)
 yayerampewtek hi ora
 意識がなくなって

(14) 二谷国松氏の語りでは「ソサモツペ sosamotpe」と表現されて [田] による意味は「壁に掛かっている刀」と記されている。

ネウン ネウン アカラ ネ ヤ キ コロ
 neun neun a=kar ne ya ki kor
 どうにかしながら
 アトゥラ ヒネ エカン ラポッケ オラ
 a=tura hine ek=an rapokke ora
 連れて来てから
 エネ ヤイヌアン ヒ
 ene yaynu=an hi
 このように思った。
 ピラトゥッ タ ヌプル エカシ
 Piratur ta nupur ekasi
 平取に靈力の強い爺さんが
 アン ヤカイエ ヒ アヌ ア プ
 an yak a=ye hi a=nu a p
 いるということを聞いていたので
 オロ タ エカン ワ
 oro ta ek=an wa
 そこに来て
 ネ エカシ (ア) オロ タ エカン ワ
 ne ekasi oro ta ek=an wa
 その爺さんのところへ来て
 ネン カ (アエ、ア、アシコプ…)
 nen ka …
 なんとか…
 (アイヌイタク では…、カ…、コロ、コロ)
 (aynuytak DEHA, ka kor, kor)
 (アイヌ語では…)
 ピラトゥッ タ エカン ルウェ ネ ヒネ
 Piratur ta ek=an ruwe ne hine
 平取に来て
 ネ エカシ ヌプル エカシ オロ タ
 ne ekasi nupur ekasi oro ta
 その靈力の強い爺さんのところに
 エカン ヒネ アイエ タプネ ネ ワ (ア)
 ek=an hine a=ye tapne ne wa
 来て私は言った。このようになって
 エカン ヒ アイエ アクス
 ek=an hi a=ye akusu
 私たちが来た事情を話すと
 ネ ピラトゥルン ヌプル エカシ
 ne Piratur un nupur ekasi
 その平取の靈力の強い爺さんが

エネ ハウエアニ 「ネイ タ カ (ア) ポタラ
 ene hawean hi “ney ta ka potara
 このように言った。「どこかでおほらいを
 (ア) ソモ アキ ヤ」 セコロ
 somo a=ki ya” sekor
 あなたはしなかったか」と
 イコウウェペケンヌ ヒ クス (オ)
 i=kouwepekennu hi kusu
 私に訊ねたので
 タプネ カネ 「むかわ タ
 tapne kane “MUKAWA ta
 かくかくしかじかと「鷺川で
 (ア) ヤイエランペウテク⁽¹⁵⁾ イシラムネ (イ)
 yayerampewtek isramne
 気を失った貧しい
 ウムレク オカ ルウェ
 umurek oka ruwe
 夫婦がいました。
 オロ タ エカン ヒネ (エ…)
 oro ta ek=an hine
 そこに来て
 イホクネ (フ…) ネ オッカヨ
 ihokune, ne okkayo
 その夫の方が
 ヤイエランペウテク シリ アヌカラ ワ
 yayerampewtek siri a=nukar wa
 呆けてしまった様子を私が見て
 アエランポキウエン ヒ クス
 a=erampokiwen hi kusu
 かわいそうなので
 (ア) カシ アキク アエポタラ ワ
 kasi a=kik a=epotara wa
 私が身をたたき清めて
 エカン ルウェ ネ」 セコロ
 ek=an ruwe ne” sekor
 来たのです」と
 ハウエアナン ルウェ ネ アクス
 hawean=an ruwe ne akusu
 話すと
 ネ ヌプル エカシ エネ ハウエアニ
 ne nupur ekasi ene hawean hi
 その靈力の強い爺さんはこのように言った。

(15)「気を失った」のは「貧しい夫婦」ではなく「夫」のみなので、「ヤイエランペウテク yayerampewtek」は言いさしの可能性もあるが、聞こえたとおりに記した。

マ (ここで音が約1秒間切れる)、ハニ (?)
 ma??, hani??
 (?)
 ヌプル エカシ ハウエアン コロ
 nupur ekasi hawean kor
 霊力の強い爺さんは言いながら
 「ネン ネ ヤッカ ウエンクル ネ ヤッカ
 “nen ne yakka wenkur ne yakka
 「誰であっても貧乏人であっても
 サンケ プ エウク ヤク ピリカ プ (へ)
 sanke p e=uk yak pirka p
 出されたものを受け取るとよかったが
 エウク カ ソモ キ ワ クス
 e=uk ka somo ki wa kusu
 お前が受け取らなかったの
 ウエンカムイ エイカイヌ ワ クス (ウ)
 wenkamuy eykaynu wa kusu
 悪い神が他より勝ったために
 エコロ ヘカチ ヤイヌム ウエン
 e=kor hekaci yaynum wen
 お前の息子の具合が悪く
 シリ (ネ) ネ ワ」 セコロ ハウエアン コロ
 siri ne wa” sekor hawean kor
 なったのだよ」と言うと
 ネ エカシ アコロ ヘカチ
 ne ekasi a=kor hekaci
 その爺さんは私の息子を
 カシ キク ルウェ ネ アクス
 kasi kik ruwe ne akusu
 叩いておはらいすると
 ナニ アコロ ヘカチ (イ)
 nani a=kor hekaci
 すぐに私の息子は
 ピリカ ルウェ ネ ヒネ
 pirka ruwe ne hine
 治って
 アコオンカミ カ キ ヒネ
 a=koonkami ka ki hine
 私は礼拝して
 エカシ アコオンカミ ア アコオンカミ ア
 ekasi a=koonkami a a=koonkami a
 爺さんに何度も礼拝
 カ キ ルウェ ネ アクス オラ
 ka ki ruwe ne akusu ora
 をすると、それから

ネ エカシ (エネプチ) スイ
 ne ekasi suy
 その爺さんは、再び、
 「エセ ア チェブ シネブ イコレ」
 “e=se a cep sinep i=kore”
 「お前が背負った魚を一匹くれ」
 セコロ ハウエアン コロ
 sekor hawean kor
 と言うと
 アセ ワ エカン チェブ シネブ
 a=se wa ek=an cep sinep
 私が背負って来た魚を一匹
 ウク ヒネ セタ エウン
 uk hine seta eun
 取ってイヌの方へ
 オスラ テク アクス
 osura tek akusu
 さっと捨てると
 ネア チェブ ネ セタ エ アクス
 nea cep ne seta e akusu
 その魚をイヌが食うと
 ナニ ネ セタ ライ ルウェ ネ
 nani ne seta ray ruwe ne
 すぐにそのイヌは死んで
 アクス オラ エネ ハウエアニ
 akusu ora ene hawean hi
 しまつて、このように言った。
 「エネ アン (イキ) アキ ワ
 “ene an a=ki wa
 「このように私がして
 エヌカラ ワ (ア) ヤクン
 e=nukar wa yakun
 お前が見たなら
 ソンノ ネ クニ エエラムアン クス
 sonno ne kuni e=eramuan kusu
 本当のことだと、お前が理解できるように
 イキアニ ネ ナ (ナ) シコトウン
 iki=an hi ne na Sikot un
 したのだぞ。千歳へ
 エアラパ ヒ アナクネ シコトウン
 e=arpa hi anakne Sikot un
 お前が行ったところは、千歳の
 イルシカベツ エムコ コロ
 Iruskarpet emko kor
 入鹿別川の中流の

パウチカラ (エ、エムク コロ パウ…)

pawcikar⁽¹⁶⁾

毒に侵された、

パウチカラ (ア) ペツ オロ ワ

pawcikar pet or wa

毒に侵された川から

エセ ワ エエク チェプ アナクネ

e=se wa e=ek cep anakne

お前が背負って来た魚は

パウチカラ (ワ) ワ クス (ニ)

pawcikar wa kusu

病気にかかっているのだから

アヌカラ ワ クス エセ ワ

a=nukar wa kusu e=se wa

わしが見たところ、お前が背負って

エコタヌン エアラパ ワ ネ ヤッカ

e=kotan un e=arpa wa ne yakka

村に行ったとしても

エウタリ エエレ ワ、ヤクン

e=utari e=ere wa, yakun

お前の仲間に食わせたら

ナニ エウタリ カ オピッタ

nani e=utari ka opitta

すぐに仲間たち全部

イサム クニ アラム ヒ クス

isam kuni a=ramu hi kusu

全滅するとわしは思ったので

(スイ) ホシキ セタ アエレ ワ

hoski seta a=ere wa

先にイヌに食わせて

セタ ライ シリ エヌカラ ヤクン (オ)

seta ray siri e=nukar yakun

イヌの死ぬ様子をお前が見たならば

エアシリ ソンノ ネ クニ

easir sonno ne kuni

はじめて本当だと

(エ) エエラムアン クス イキ アニ ネ ナ」

e=eramuan kusu iki=an hi ne na”

わかるようにしたのだぞ」

セコロ ハウエアン コロ ネア アセ ア

sekor hawean kor nea a=se a

と言うと、私の背負った

チェプ オピッタ ウファイカ ワ

cep opitta uhuyka wa

魚全てを燃やして

ルウェ ネ ヒネ オラ

ruwe ne hine ora

しまってから、

フレ セタ ポロ セタ アナ プ

hure seta poro seta an a p

赤い大きなイヌであったが

ネア セタ (コオ…) エウン オンカミ コロ

nea seta eun onkami kor

そのイヌに礼拝して

ネア セタ (アナ、ラ、) ライケ (ヒ) ヒネ

nea seta rayke hine⁽¹⁷⁾

そのイヌを殺して

ナニ リ ヒネ オラ (ア)

nani ri hine ora

すぐに皮を剥いで

タン セタ カム エセ ワ

“tan seta kam e=se wa

「このイヌの肉をお前が背負って

アエコレ クス ネ ナ

a=e=kore kusu ne na

持たせるのだぞ。

エセ ワ エアラパ ワ

e=se wa e=arpa wa

お前が背負って行って

エコタヌ タ エアラパ ワ (ア)

e=kotanu ta e=arpa wa

お前の村に行って

タン フレ セタ (ポ、ア)

tan hure seta

この赤イヌ

カミヒ アナクネ エSPA ワ

kamihi anakne e=supa wa

の肉は煮て

(エ) エウタリ オピッタ

e=utari opitta

お前の仲間の全てを

エタク ワ (ア) エエレ

e=tak wa e=ere

招いて食べさせ

(16) [久] p.233に「pawcikar 狂人が伝染する」と記載あり。ここでは文脈を考慮して「毒に侵された」と訳した。

(17) 先に魚を食わせて死んだイヌに「赤い」という描写はないので、この時のイヌは別のイヌと思われる。上田氏の日本語による口演でも先にイヌが魚を食べて死んだ後で「大きなイヌを殺して」と述べている

ポネヘ アナクネ (エ) エウフイカ ネ ヤ
 ponehe anakne (e) e=uhuyka ne ya
 骨は燃やすとか
 エSPA ネ ヤ キ ワ ルリヒ ネ ヤ、
 e=supa ne ya ki wa rurihi ne ya,
 煮るとかして汁物にするとか、
 (ア) エウフイカ パシパシヒ
 e=uhuyka paspasahi
 お前が燃やした灰を
 オピッタ エウウオマレ ワ
 opitta e=uwomare wa
 全て拾い集めて
 (キ) キロウシ、キロウシ (エウンニ…)
 kirousi, kirousi
 腰の両脇の腰骨のところに
 エチコタチ ヤクン テ パクノ (オ)
 eci=kotaci yakun te pakno
 塗りつけたら今まで
 イペエウエン ワ ヤイモイモイェ カ
 ipeewen wa yaymoymoye ka
 食べられずに動くのも
 ヌクルパ コロ オカ エウタリ オピッタ
 nukurpa kor oka e=utari opitta
 困難な人たちみんな
 だんだんに (エ) ピリカ クニ アラム クス
 DANDANNI pirka kuni a=ramu kusu
 徐々に治ると思うから
 タン セタ カム オピッタ
 tan seta kam opitta
 このイヌ肉を全て
 アエコレ ナ」セコロ ハウエアン コロ
 a=e=kore na” sekor hawean kor
 持たせるぞ」と言って
 ネア セタ カム オピッタ イコレ ルウェ ネ
 nea seta kam opitta i=kore ruwe ne
 そのイヌ肉をすべて私にくれた。
 アコオンカミ ア オンカミアアナ コロ
 a=koonkami a onkami=an a =an a kor
 私は何度も礼拝すると
 オラノ (エカラ ヒネ)⁽¹⁸⁾
 orano,
 それから

アコロ タンネサラハ タ エカン ルウェ ネ ヒネ
 a=kor Tannesaraha ta ek=an ruwe ne hine
 お前のタンネサラに来て、
 タンネサラ タ アコタヌ ウン ウタラ
 Tannesar ta a=kotanu un utar
 タンネサルの人
 オピッタ ケウオロサクパ ケメウエンパ ワ
 opitta keworsakpa kemewenpa wa
 みんなに体力がなくなり飢えて
 (ア、ヤイモン…) ヤイモイモイェ カ
 yaymoymoye ka
 自分で動くことも
 ヌクルパ コロ オカ ウシケ タ
 nukurpa kor oka uske ta
 出来ないでいたところに
 エカニ オラ ナニ ネ セタ カム
 ek=an hi ora nani ne seta kam
 来てすぐにイヌの肉を
 アSPA ヒネ アプカシ エパノ (?)⁽¹⁹⁾ オカ
 a=supa hine apkas epano?? oka
 煮て歩ける (?)
 ウタラ アナクネ (エ) アラキパ ワ
 utar anakne arkipa wa
 者たちは来て
 ネ セタ (カム) カミヒ エ ネ ヤ
 ne seta kamihi e ne ya
 そのイヌの肉を食べるとか
 ルリヒ ニ ロク ニ ロク ネ ヤ キ パ
 rurihi ni rok ni rok ne ya ki pa
 汁を吸ったりとかして
 ルウェ ネ ヒネ オラ ネ ポネヘ⁽²⁰⁾ アナクネ (エ)
 ruwe ne hine ora ne ponehe anakne
 いて、その骨は
 アウフイカ ワ ネ パシパシ⁽²¹⁾ オピッタ
 a=uhuyka wa ne paspasi opitta
 燃やして、その消し炭をすべて
 アウウオマレ (エ) ポネヘ ルリヒ ネ ヤ (ア)
 a=uwomare ponehe rurihi ne ya
 集めて骨の汁物だとか
 アラキ ヌクリ ウタラ エウン アナクネ
 arki nukuri utar eun anakne
 来れない人たちへは

(18) 「エカラ ヒネ e=kar hine (お前がして)」は文脈上は言いさしの可能性が高いと判断した。

(19) 不詳。

(20) 二谷氏のテキストでは「骨」ではなく「肉」を燃やす描写になっている。

(21) 実際には「パシパシ」のように聞こえる。

アコイヤニ ネ ヤ キ (イ) ヘカッタン ネ ヤ
 a=koyani ne ya ki hekattar ne ya
 食べ物を届けて、子供たちとか
 オンネクル ウタン ネ ヤ オピッタ (ア、ア)
 onnekur utar ne ya opitta
 年寄りたちとか、みんなに
 アエレ (ヤ、ア) ネ ヤ ルリヒ アニレ ネ ヤ
 a=ere ne ya rurihi a=nire ne ya
 私は食べさせたり汁を吸わせたり
 キ コロ オカアン (ラ) ラポッケ
 ki kor oka=an rapokke
 しながらいたところ
 トウッコ レレコ ネ アクス オラ
 tukko rerko ne akusu ora
 二三日すぎると
 ネン ポカ アウタリヒ (イ)
 nen poka a=utarihi
 なんとかして私の仲間も
 ヤイエモイモイエ ポカ
 yayemoymoye poka
 やっと動くことが
 キ エアシカイパ パクノ ネ ヒ オラノ
 ki easkaypa pakno ne hi orano
 できるようになって
 アエヤイコプンテク コロ (オ)
 a=eyaykopuntek kor
 私は喜んでいて
 ケウオロコロバ⁽²²⁾ ヒ オラノ
 keworkorpa hi orano
 彼らの体調がよくなって
 エキムネパ アクス チロンヌプ カ
 ekimnepa akusu cironnup ka
 山へ狩に行くとキツネを
 ライケ ワ イワクパ イセポ カ
 rayke wa iwakpa isepo ka
 殺して帰り、ウサギも
 ライケ ワ イワクパ コロ
 rayke wa iwakpa kor
 殺して帰ると
 アエヤイコプンテク コロ ナニ
 a=eyaykopuntek kor nani
 私は喜んですぐに

ネ ワ オカ イセポ ネ ヤ チロンヌプ ネ ヤ
 ne wa oka isepo ne ya cironnup ne ya
 そうしたウサギとかキツネとか
 ナニ (イ) カミヒ (ア) アウタリ オピッタ
 nani kamihi a=utari opitta
 すぐにその肉を仲間みんなに
 アエイメク⁽²³⁾ (イメク) ワ アエ イ ネ ヤ キ コロ
 a=eymek wa a=e hi ne ya ki kor
 分配して食べたりしながら
 オカアン ラポッケ (ウエ) アウタリ
 oka=an rapokke a=utari
 暮らしていたところ、仲間は
 (ケウ) ケウオロコロ ヒ オラノ アナクネ
 keworkor hi orano anakne
 元気になってからは
 エキムネパ アクス ユク カ カムイ カ
 ekimnepa akusu yuk ka kamuy ka
 山へ行くと、シカもクマも
 ロンヌパ ワ イワクパ ワ
 ronnupa wa iwakpa wa
 殺して帰って
 エアラキンネ アエヤイコプンテク ワ
 earkinne a=eyaykopuntek wa
 本当に私は喜んで
 オラノ ピラトゥルン エカシ エウン
 orano Piratur un ekasi eun
 それから、平取の爺さんへ
 ヤイライケアン ヒ アイェ ネ ヤ
 yayrayke=an hi a=ye ne ya
 感謝の言葉を言うとか
 キ コロ オカアン ラポッケ
 ki kor oka=an rapokke
 しながら暮らしていたところ
 タネ アコツ タンネサラ カ (ウ)
 tane a=kor Tannesar ka
 今は私のタンネサラも
 ウタラ カ シノ (オ) ニシパ
 utar ka sino nispa
 人々も立派な長者に
 ネパ シリ カ アヌカラ (ア)
 nepa siri ka a=nukar
 なった様子を見ました。

(22) ケウオロ kewor (力)、コロ kor (を持つ)、パpa (動詞を複数形する接尾辞) と解釈した。[ジ] p.249に「Keworo ケウオロ、力量」と記載あり、[萱] p.223では反対語としての「ケウオロサク【kewor-sak】力がない。」と書かれ、その語源分析で「ケウオロ=力」と記載されている。

(23) 上田氏は「アエイメク ワa=eymek wa (私がそれを分配して)」と言っているが、肉を獲ってきたのは村人なのですぐに「イメク imek (彼らがそれを分配する)」と言い直した可能性もある。しかし、[ア]p74で同じモチーフの「アウコウサライエ ワ a=ukousaraye wa ((私が)分け合って)」というように、主人公自身の行動である第一人称で表現されているので、それと同様に筆者が解釈した。

ネプ カ (ア) アエシンパイ カ
 nep ka a=esinpay ka
 私はなにも心配事も
 アコン ルスイ カ ソモ キ ノ (ノ)
 a=kor rusuy ka somo ki no
 欲しいものもなく
 アウタリ トウラノ オカアン アイネ
 a=utari turano oka=an ayne
 仲間と一緒に暮らしたあげく
 オンネアン エトコホ タ (ア) アウタリ エウン
 onne=an etokoho ta a=utari eun
 私が亡くなる前に仲間へ
 タプネ カネ 「ピラトウル ウン エカシ
 tapne kane "Piratur un ekasi
 かくかくしかじかと「平取の爺さんが
 アン クシケライポ (アウタ、)
 an kuskeraypo
 いたおかげで
 アコタヌ ヘプニ ワ
 a=kotanu hepuni wa
 私らの村が栄えて
 (タ) タ パクノ (オ、ニ、フレ)
 ta pakno
 これほどに
 フレナイ ネ ヤッカ タンネサラ ネ ヤッカ
 Hurenay ne yakka Tannesar ne yakka
 振内であってもタンネサルであっても
 ニシパ アネ ルウエ (ネ) ネ クス
 nispa a=ne ruwe ne kusu
 長者になったので
 (ウ) テワノ ピラトウル (ウン ネ) タ
 tewano Piratur ta
 これからは平取で
 ネプ カ アン ヤッカ エチウコパヨカ
 nep ka an yakka eci=ukopayoka
 なにがあってもお前たちは行き来して
 ウコウエンサンベサク ノ ピラトウル ウン (ウ)
 ukowensanpesak no Piratur un
 お互いに悪意を持たないで平取へ
 ウコパヨカパ エチ (パ) ウコパヨカ
 ukopayokapa eci=ukopayoka
 お前たちが行って
 ウコウエンサンペコロ ソモ キ ノ
 ukowensanpekor somo ki no
 お互いに悪い気持ちを持たないで

エチスクプ ヤク ピリカ ナ」
 eci=sukup yak pirka na”
 暮らしたらよいぞ」
 セコロ (フレ) フレナイ だか
 sekor Hurenay DAKA
 と振内だか
 タンネサラ ウン アイヌ イソイタク コロ (コロ)
 Tannesar un aynu isoytak kor
 タンネサラの男が話して
 オンネ セコン ネ。
 onne sekor ne.
 死んだと。

3 日本語テキスト

(上田) したから、もう、む、昔、今でもタンネサヲ Tannesar っていうとこ、あるんだそう、振内の方で。

(大谷) うんうん。

(上田) だっていうけどその、タンネサヲの、にいた人、だっていう、だっていうけどもって、タンネサヲの人があー、ヤイエイトイタク ウウエペケレ yayeysoytak uwepeker (自分で話した物語) なんだべさね。

で、あの、それこそ、食うものなくて、とって食うものもなくなって、なんもない、もう、さい…、最初はすごい、良い食べ物でほんとに、クマでもシカでも豊作で、なんも不自由なく暮らしていたのに、どうしたもんだか急に自分の部落、まるっきり食うものなくなってしまうて、んでもう、どうもならないから、でいるうちに人の話でその、シコツ Sikot ったら今の支笏湖だっていうんでしょ。

(大谷) うん、千歳ね。

(上田) 支笏湖ですごい魚捕れるっていう話聞いてから、そこさ行けば魚捕れるんでないかなと、と思って、そこさ行くときにその、じぶ…、歩けるだけのヘカチ hekaci (男の子) っていうから、自分の息子でも、ヘカチ、男の子連れて、い…、行って、鷓川さ行って、け、鷓川で、渡船場あって、その渡船場にこして (渡しての意) もらったときは、行くときは、男の人、こしてくれて行ったもの、その支笏湖さ、行ってから、魚いっぱいあるから、あの、ニエシケ niyesike (しよいこ) っていうたら、薪背負うぐらいのその干した魚背負って、まだ (また) 戻って来たときに、鷓川さ、さ、来たけ、こんど、男の人でなく、女の人が出て、

自分さこしに来たから、舟の中入ってから、「なして (どうした)」言っ、「昨日は男にこしてもらったのに今日は女でこしてくれたの？」って聞いたけ、あの、「夕べ遅くなってから「誰か、こしてくれ」っていう、叫ぶ、声したから、自分の旦那が出て行ったけ、もう、なかなか入ってこないでいるうちに川の中さ、なんかベチャベチャ、あ、音するから、でも、不思議だからこんど、お、ガンビの皮さ火つけて、持って出たけ、舟、自分の旦那も舟の中にいるようで、舟で流れて下がったから、ど、走って下がって、その舟おさえて、見たけ、舟の中に自分の旦那、馬鹿 (意識が朦朧とした状態の意) になっていて、どうかこうか、連れて、自分の家さ連れて来て、寝かしたけ、そのままになって、また (まだ) 馬鹿になって、え、いるんだ」っていう、

その女が言ったの聞いたけ、もう、とってもかわいそう

で、あんな貧乏暮らししてたの見たのにと思って可愛そうだなと思ったから、あ…、「魔除けしてやるか？」って聞いたけ、よるこんであれするから、自分とその、旦那さ、あ、はい…、その家の中さ入って行って、二、三回カシ、カシ キク kasi kik (魔払いする) したっていうから、フッサ フッサ hussa hussa (フッフと息を吹きかける) して、魔除けしてやったけ、え、そのうちにもう、元になって、起きて、その、

(上田氏の小学生の孫が帰宅した声がある)

(上田) あー、いつのまにか帰…、あ、これ (マイクのこと) さ入ってる、

(大谷) ふっはははは。

(上田) 喜んで、

(大谷) うん。

(上田) こんど、たった一つの刀しかあったの見たもの、その刀出して自分さ、くれる、くれたけど、あんな貧乏してるものかわいそうだと思って、取らないで戻して、やってこんど、それぎり帰って来たけ、サ、サヲプトウ Sar putu (沙流川の河口のあたり) さ、サルフトさ来たけ、え、自分の連れて行った息子がこんど馬鹿になって、歩くこともなんもわからなくなってしまって、

そこでどうかこうか…、で、もうわかんないからもう、考えてみたけ、「平取にすごい、神信仰してるエカシ ekasi (爺さん) いる」っていうの聞いたもんだと思って、その、エカシーさ、頼って、来てこん…、来て、コパク トウイエ kopak tuye⁽²⁴⁾ (〜へ近づく) っていうたら、その「頼って来た」っていうことだ。で、来て、エカシのとこさ来たけ、そのエカシ、

「来る途中で、何か、途中で、何か、コトウク kotuk (くつつく) しないで来たか？」っていうから、こういうわけで「困っている鷓川の渡船場の、おー、貧乏暮らししてる、とこの若夫婦の人らのとこさ来たけ、その旦那の方が馬鹿になったの見て、とってもかわいそうだから、あ、魔除けして来たんだ」ったけ、

「なにか貰ったか？」というからその、

「貧乏してるの、たった一つの刀しかないのに、その刀出して自分さくれたから、いらない」って、「かわいそうで取れないから、取らないで来た」ったけ、そのエカシ言うの、

「なんぼ貧乏してでも、いいから、そういう悪い魔除け

(24) [ジ] p267に「kopaktuye コパクツイエ、近ヅクヲ望ム。」と記載あり。[萱]p244に「コパク トウイエ 【kopak tuye】 (〜へ) 近づく。」と記載あり。

したときは出してもらったものは必ず、なんでもいい、少しでも貰うべきなものだもの、貰わないで来たからその化け物が、あ、自分が一番偉くなったっていう、気持ちでその逆に敵（かたぎ）とって、とるのにその、おの、連れてた子供がまたそういう、う、渡船場にいた人みたいに馬鹿になったんだ」って言いながら魔除けしてくれたけ、すぐその自分の連れてた子供もよくなったあげくにこんど、その、言うのに、

「そのシコトゥン Sikot un（千歳の）、いて、イルシカペツ Irukapet（入鹿別）⁽²⁵⁾ っていうところには、あ、ウェン wen（悪い）、悪い化け物がある川でそこに入った魚は食ったら恐ろしい川だのに、そ、だからその魚がたくさんあるのに、そっから魚、お前、背負って来たにしても自分のやることみたら、本当か嘘か、わかるから」って自分の背負って来た魚、一つ取って投げて、イヌ食ったけ、すぐそのイヌ死んだの見たけ、

「これ見たら、はじめてわかるべ」って言いながら、その、イヌも死んだの見たべし、こんど自分の魚も背負って来た魚もみんなこんど、そこでその、平取のエカシ、焼いてしまっ、それからこんど、イヌ、大きなイヌ、を殺して、殺す前に、お祈りして、それから、あ、殺して、その肉全部、う、まるまま自分さ背負わして、「この肉持ってって、肉のそこは炊いて食え、骨は焼いて、その、炭を、キロウシ kirousi（腰の両脇の腰骨の

部位）ったら、こういう節々のこと、キロウシっていうんだから。キ、キロウシ、エコタ、コタチ kirousi kotaci（腰の両脇に塗りつける）せえって、そしたらもう絶対もう、節々から、力ついて、そのコタン kotan（村）、にいる、若者ったら、みんな元気になって働いて食うようになるから」って言いながらその、肉貰って来て、自分の部落さ来てから、すぐその肉炊いて、歩けるような人はみんな来て、自分の家さ来て、そのイヌの肉食ったり、汁のんだり、来れない人さは持ってって飲ましたり食わしたりして、い、その肉、骨の炭は取って、みんな、この節々さ付けたり、そんなことしてるうちに何日か経ったら、もう、こんど、もう力ついたって、山さ行ったら、キツネ獲ったり、ウサギ獲って来たりなんかして、それ、こしらえて食っているうちに、みんな力ついて元気になってから、山さ行ったらシカも獲って来たり、クマ獲って来たりして、

「もう、食うのも不自由なく、また元通りの、を、なー、アイヌ aynu（人間）になったんだから、自分死んだ後でも絶対その、子供ら、一人前なっても平取の、に恩があるんだから平取のエカシさ、のおかげでこのくらいになったんだから」って言って、「平取さ、の人らと仲悪くしないで仲良く、ずっと永久に暮らして、ればいいから」って、その振内だかタンネサラだかのアイヌの物語なんです。

(25) 鶴川の西隣を流れる河川名である。

Ainu Oral Literature “Uwepeker” :

“The Man of Tannesar”

Yoh-ichi OHTANI

This text is the author's transcription of the audio recording of an Ainu story presented by Ms. Toshi UEDA (1912-2005), who was born in Penakori, Biratori Town, Saru District, Hokkaido. Among Ainu oral literary art, it belongs to the genre of uwepeker.

The main character of this story is a man who resides in the village of Tannesar. Starvation threatened his village, so the man took his son and embarked on a journey in search of food. On the way back, the man cured the illness of a sick, destitute

person, who offered a treasured sword as thanks. However, the man felt pity for the destitute person, and refused the treasured sword. They continued on their path home. Later, the man's son fell unconscious, and the man sought the advice of *nupur ekasi* (an elderly clairvoyant man) in the village of Biratori, who cautioned, “your refusal of the sword has caused this.” The *nupur ekasi* performed an exorcism, saving the man's son. Then, the *nupur ekasi* taught the man how to save the village of Tannesar.